
霊剣、誘う

kadochika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊剣、誘う

【Nコード】

N0160Y

【作者名】

kadochika

【あらすじ】

軍事国家の兵士選抜に参加した青年、グリユク・カダン。

選抜といっても人並の体力があれば通過でき、あとは戦争さえ起きなければ、飢えずに命の危険もない仕事に就けるはずだったのだが

……

1・東部への列車（前書き）

既に全文が完成しております。

約3000文字ごと、8回前後の投稿になる予定です。

間違えて第1回は短編扱いで投稿してしまいました。

お気に入りを下さった方、大変申し訳ありませんでした。

1・東部への列車

大陸東部の妖魔領域は、有史以前から存在していました。

呪われし不朽の身体と、人類が持たない超自然の魔力に対して、父祖たちがささやかながらも力の限りの抵抗を続けてきたことは、誰もがご存知の通りです。

神の遣わした天使たちの教えで、人類は暦と銃と聖典を手にしました。戦いは続きます。

どうか国民の皆様、信徒であられる皆様。

彼らの導きの元に、更なる輝かしき勝利を、後の世代へ。

国王即位演説より抜粋。

思い起こしてみれば、しばしばまともな時間の感覚を見失っていたことに気づく。

人だった頃の記憶は残っていた。戦友との思い出も。今ではこのような有様なので時間の感覚こそ曖昧になったが、幸い、さほど長くこのままだった訳でもないらしい。

この先の保証はないが。

いつの頃からか……少なくとも、この世に存在を命じられた時から。

ひたすらに待っていた。

出会すべき主を。

列車に乘せられて三日目の朝。

東部に向かう選抜訓練参加者を乗せた騎士団の列車は、森の中の鉄軌の上で朝日に向かって気の抜けた突進が続けている。

目覚めてみれば、伸びが目立つ己の髪がグリユクの目に入った。そろそろ切るかまとめるか。髭も剃れないのでそろそろ鬱陶しい。車中の匂いは昨日よりやや強まっている。自分も含め、車内に敷き詰められたようになってる男たちは、衛生については濡らした雑巾で体を拭くことしか出来ないのだから当然だ。シャワーの付いた鉄道など、彼は見たことが無かったが。着替えなどもなく、ほぼ全員が初日から着のみ着のままの私服で乗車生活を送っていた。彼を含めて、乗っているのはそのような男たちだ。

「うう……」

生来寝覚めは良い方だったが、グリユクは配布された薄手の毛布をどけると、上体を起こして背を伸ばした。赤みの強い髪に、深い色の碧眼。垂れた目尻だが弱弱しくは無い。貸与されていた薄い毛布はやや小さく、身長は180cmを越えて筋量も少なくは無い彼にとっては物足りない大きさだった。

列車の車内には王都圏の旅客車に備わっているような椅子などは無く、家畜用車両の製造過程に少し手を入れて転用したものらしい。洗面所については各車両の前後に二つあるので用足しについては問題ない（清潔さが保たれているとはいえないが）。乗車密度は詰め込まれたと辛うじて表現できるかどうかといった程度で、体躯の大きいグリユクでも膝を曲げれば横にはなれた。騎士はどのようなか知らないが、従士では選抜訓練の時点で既にこの扱いだ。選抜訓練が終われば、いつ戦闘地帯となるか分からない東部のどこかの基地で

任務に就くのだろう。

見渡せば周囲の男たちは殆どがまだ眠っており、近い場所で気の合う時間に目覚めた何人かが小声で何かを語り合っている。年齢はややバラつきがあるが、募集要項には28歳までとあったので、それが上限だろう。立って窓から手を出し煙草を吸っている者、ボリボリと固形糖を齧っている者もいた。

車両後方の扉が開くと、配膳の台車がやってきた。2m近い高さの台車が何台も、鉄道局の制服に前掛けを垂らした年配の係員たちに押され、車両の通路を無造作に進行していく。はみ出した足はこれまた無造作に押しやり（車輪が小さく、はみ出した就寝中の男たちの足がひき潰されることは無かった）、二台が車両の大体中間の地点に止まると、ぶっきらぼうな係員二人の声を合図に配食が開始された。眠っていた者たちも体を起こし始める。床に足を畳んで黙って順番を待っている、誰かが声を上げて嘆いてみせるのが耳に入った。

「まあた挟むのを変えただけかよ！」

笑い声とも溜息とも取れない呻き声の輪が車中に広がる。配食係たちは慣れたもので、そんな呆れたような罵声に顔色を変えることも無く、盆を配ってゆく。彼らとの付き合いも早三日目ということになる。

渡された盆の彩りは、最近グリユクの故郷でも普及し始めた紙のカップに注がれた熱いスープと、切れ目を入れて肉を挟んで紙で包んだパン。これが朝食だった。パンのボリュームだけはちょっとしたものだ、配食用の盆も、予算が無いのか目に見えて古びたものが多い。

人工肉サンドを手で掴んでようやく気づいたが、三日目に至ってもこのようなメニューばかりなのはフォークやスプーン、皿すら省く為らしい。盆があるだけ善良な処置か。別に受刑者を輸送してい

る訳でもないのにこの待遇は、この先の選抜訓練に合格しても食生活には期待はしない方が良くということだろうか。

「（そもそもこの盆だってまともに洗ってるのかも怪しいもんだ……）」

グリユクも一通り心中で毒づくが、中々に空腹でもあった。特に悪く匂う訳でもないので、パンを齧り、スープに口をつける。決して、口にした途端に吐き捨てたくなるような酷い代物ではない。だが、ややとろみのあるスープは具が全く無く、また無理矢理栄養素を添加されて混沌とした味を更に塩と香料で誤魔化しただけで、滋養は確かなのだろうか積極的に飲みたいものでもなかった。パンに至っては生産性最優先の無発酵で、肉は啓蒙者たちが工場で生産した合成食肉だ。昨夜は同様のパンに魚の切り身のようで少し不自然に線が入った何かが挟んであり、昨日の朝はすこし筋みを増して鳥皮のような膜状のもので包んだ肉。それぞれ魚肉や鶏肉を再現したつもりなのだろう。が挟んであった。昼だけはチョコレートから甘みをすっかり抜き取ったような固形の板状の食品も一緒に配られた。どれも同様、味が悪い。味を大目に見たとしても、人間には満足な食事が続くと同じメニューには飽きが来るということを啓蒙者の司祭たちは想像したことも無いらしい。彼らはあくまで善意でやっているようだ。

食料の生産はその啓蒙者たちによるものだが、実際の配給、調理や配膳など、それ以外はほぼ全て人間がやっている。意欲に乏しい担当者がやっているのか、何度か味わった合成食肉の調味加減には酷いむらがあった。スープの方もあまりのんびりと嚙っていると添加された神聖な香料とやらでむせ返るので、グリユクはパンを片付けると意を決して、やや冷め始めた（冷めてしまってもっと飲みづらい）スープを食道に流し込んだ。じわじわと喉を上ってくる僅かな吐き気から注意を逸らすように、改めて車内を見回す。

車内の左右各側で、彼を含めた志願者達は全員、空間の許す限りに思い思いの姿勢で座っている。短い毛の生えた方形の断熱マットを敷き詰めた安物ではあったが床は剥き出しではなく、洗浄もそれなりにされたようだった。だが、家畜車両同様に窓を小さく取った作りが、申し訳程度の強さしかない冬の朝の光を更に弱めていた。飢えは無いことと、暖房だけはそれなりのものが機能していることが救いだ。

「まあ、最初はこんな寝れっかって思ったけどなあ。慣れってこえーな」

初日は皆強張っていたが、既に談笑する者さえいる。列車の関係者を除けば（いや、彼らもそうなのかも知れないが）程度の差こそあれ、恐らく全員が食い詰めた失業者なのだ。選抜といっても、ただ地上騎士団に入団して騎士より下の階級である従士になるだけなら並の基礎体力さえあればいい（というのが、非公式ながら知れ渡っている王立地上軍の方針だった）。そして、従士だろうと着任すれば最低限の生存は保証される。慢性的な不況に喘ぐ王国にあつて、不人気ではないという程度の志望者はいた。例え選抜会場への列車便がこの程度の代物だったとしても、まだまだ下があるのだ。それが、宗教軍事王国スウィフトガルドの社会の一断面だった。

訓練期間が始まるまでは楽な時間が続くと見込んでいるのだろう。選抜参加者はみなそれぞれに、朝食を終えてまた眠っているか、馬の合う相手と郷里の愚痴や他愛も無いゴシップに打ち興じていた。

王国政府は公式には否定しているが、啓蒙者たちが今次の征伐軍についてかなり真剣に最終戦争だなどと意気込んでいるのを、多くの巡礼者たちが目の当たりにしているらしい。自分たちが選抜に参加するのも厳しい前線で欠員が多く生じた（もしくは生じる見込みが高い）からだということはさすがに誰もが意識しており、日中は

それなりに喧しい車内にあってもそこだけは話題に上がることがなかった。

グリュクに関して言えば、率先してその手の話題に参加する性分ではないので、結果、暇になる。

特にやることも無いので、もう少し眠ることにした。

1・東部への列車（後書き）

ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。

2・選抜訓練開始（前書き）

連載の次話投稿のやり方がわからず苦戦しておりました……

短編の方に間違って投稿してしまった1話目をお気に入りにしてくださった方には大変申し訳ありませんでした。

なお、展開の都合上、全6回に分割することとなりました。

こちら8回前後と書いておきながら申し訳ありません。

2・選抜訓練開始

王国では、魔女狩りというものが重要な習慣だった。

啓蒙者たちより授かった検知機材を使用し、異端審問官や地域の教会が定期的に 時には抜き打ちや政治に関わる目的で突発的に活動し、僅かでも魔女の因子を持つ者を摘発し、「駆除」するのである。

魔女としての能力と因子の多寡は必ずしも比例せず、因子が確認されても魔女としてはなんら無力であることも少なくない。

例え両親に因子がなくとも、成長に従って発覚するというケースがあり、出生時から成長期を過ぎるまで、何らかの形で検査が行われる。

グリユクの母も、そういった潜在的な魔女の一人だった。

当時既に一部で知られていた隔世遺伝という現象だったらしいが、審問官に賄賂を渡した嫌疑まで掛けられ、当時は官民を問わず、王国世論が大いに揺れたものだった。

幸い、反応が出なかった幼いグリユクは教会でも最穏健として知られる一派の庇護を受けることが出来たが、両親と、母に連なる一族はそうは行かなかった。陽性の反応が出たため啓蒙者に直接”処分”された母を除く全員が、汚染種庇匿罪による悔悟刑処分。王国には国教と法に定められるところの”啓蒙教義”に基づき、単純な死刑ではなく、それより”上位”とされる酷虐的死刑が存在していた。名付けられる前に親元から引き離されたことを含め、彼は何も覚えていなかったが。

”穏健派”たちによって徹底的に審問の目から秘匿されながら育ってきた彼がそれを知らされたのは、18歳を迎えた年、審問法に定められた最後の魔女反応検査が無事に終わったその翌日だった。

秘境同然の僻地にひっそりと立っていた故郷の教会が、穏健派が政争で劣勢になったことで周辺開発とあわせて人員を刷新すること

となり、それがグリユクが外の世界に出る契機となる。

そして、3年ほど、東部の地方都市をさまようように転々とし、拳句の果てに自分の母と母の家族を皆殺しにしたという教会の、その手先となる騎士団に入団するために、こうして列車に揺られている。

彼にとっては、もはや己がどう生きればいいのか見当が付かないというのが正直なところだった。

かといって、生きるのを止める気にもなれないのではあるが。

四日目の朝、列車が会場近くの貨物駅に到着すると、身動きもままならない車内に飽き尽くしていた志願者たちは率先して駅に下りた。駅といっても貨物駅でプラットホームなどがなく、志願者たちは側面の運搬口から思い思いに飛び降りる形での降車だが。暖房でふやけた肌に、東部の冷たく湿った風があたるのが心地良い。

駅の出口の受付で配られた小さな紙切れを見ると、地図だった。印刷機が古いのか図がかすれがちで読み辛いが、少し歩いた開けた場所で選抜を開始する旨が記してある。

駅を出ると、来場者などの担当者と思しき、眼鏡の娘が多少気の抜けた声で通告してきた。

「それでは選抜参加者は地図の所定の場所へ移動をお願いします」

女気の無い道程もあってか、口笛を吹いて色目を送るものもいる。降りてからは更に歩き、簡素な二階建ての軍施設と思しき建物が添えられた運動場のような場所までしばらくかった。周囲は申し訳程度の鉄条網以外はグリユクの見慣れない東部の樹木で溢れており、国境近くへとやってきたという実感を強めた。

選抜志願者は千人ほどもいるか。出発前の測定検査で撥ねられた

極少数以外は心身両面で問題もなく、列車に揺られての長旅でも脱落者は無いらしい。多かつたのは愚痴だけだった。

全員集まりきったかという頃合に、騎士団の野戦服を着た騎士たちの一段が現れ、運動場の入り口から志願者たちを挟んで反対側へと回っていった。

志願者たちがうるたえる間もなく、その中から出てきた軍の礼服を着た士官が、カツカツと木製の指揮台に上った。

「えー、本日は地上軍従士選抜試験へようこそ、歓迎いたします。わたくしは王国地上軍、東部方面第216騎士団教練騎士長、ウィレル・アルモリアー等重騎士です」

物腰からして十分に年季と軍歴を兼ね備えた軍人でありながら、なにやら風采の上がない役人めいた出だしですらすらと述べたて始めると、志願者たちは聞き逃したら不味そうな気配を察したのか、整列こそしないものの指揮台に向いて直立した。グリュクもつい習う。

「みなさんには当基地の教練騎士隊が付き添いますので、彼らの指示に従って選抜過程に進んでください。みなさんが栄光ある教会地上軍として共に戦う戦士となれることを願っております、それでは選抜開始とします。以上！」

そう言い切ると彼はそそくさと指揮台を降り、騎士集団と敬礼を交わし、足早に施設の方へ歩いていき、そこへ繋がる階段の向こうに消えた。

「やたら手短だなおい……」

「立ち続けなくていいのは助かるけどこれはこれで釈然としない……」

気構えの肩を透かされたのか、志願者たちの輪に半ば呆れたようなざわめきが広がっていった。

騎士の辞では選抜後のことや脱落者の扱いなどは一切触れられていない。野戦服の騎士たちに聞けばいいのだろうが、このような東部の小規模な拠点ならば、レジュメを作って配る程度のことをやらせる閑な人員などいくらでもいそうなものだ。

周囲の意見に心底同意し、グリユクは騎士たちが選抜試験のための列を作るよう始めた指示に従った。

あれから、水の入った水筒を配布され、森の中を二時間ほど歩いた。到着から数えて太陽が昇りきりつつある計算だ。道は一応の舗装を施されて幅は10m程度、大型の軍用車両でも行き交えそうではある。ただしひび割れの補修が追いついておらず、そこから草が生い茂っていることも度々だった。どこかしこも東部はくたびれている。思い出したように古ぼけた水銀灯や測量用の標識が設置されているだけで、ガイドレールなどは無い。道は曲がりも少なく森の中を奥へ奥へと続いており、両側を覆いつくす森は極相に達しつつある林冠から光が差し込み、腐葉土に覆われた地面をかるうじて照らしていた。

そんな道をほぼ真っ直ぐ歩き、グリユクの場合は志願者同士の間隔がかなり延び、脱落者も出たのではないかと訝る頃に到着地点にたどり着いた。山の麓がそこだけ切り開かれており、千人ほどの志願者たちが十分な間合いで広がっても騎士達が全員を視認できる程度には広さがあった。こういった選抜試験や訓練などで使うために整備されたのだろう。

そこで到着できた志願者たちは思い思いにぐったりと尻を土に下ろし、先に手配しておいたらしい輸送車の荷台から、騎士たちが何

やら袋を配っていた。

「……腹減ったなあ」

彼も体力には少々自身があつたが、さすがに朝から飲まず食わずで二時間の歩行は堪えた。一時間も経った頃から抗議を続けていた腹の虫をなだめつつ、背後の幌の輸送車に大量に積まれた袋の中から一つ、騎士から受け取る。背負ったり腹に巻きつけるためのベルトが付いており、くすんだ緑の色からして、恐らく行軍用の背囊だった。呼びかけられている説明によると、どうやら、これを背負わせて選抜を続けるらしく、その前にこの中の糧食で腹を満たせということらしい。

力の入らない腕を叱咤して背囊を開いている場所に置き、両掌に乗るほどの大きさの角ばった缶を取り出して、ピンを回してこじ開けると、四日ぶりの人間の食事が顔を出した。

全て加熱などされておらず冷たいものの、中身は牛肉のシチュー、塩味の効いた茹で豆、味は無いものの歯ごたえは小気味良いビスケット、干し葡萄。水出し用の穀物茶バッグ（水筒の水を使うらしい）まであつた。全て耐水袋に入れられており食器などなかったが、量は十分、味もこの空腹なら文句など無い。先ほどから周囲で先着の志願者たちが無言でガツガツと煩く食う音がしていたが、グリユクは心底から納得した。啓蒙者たちの栄養食などより遥かに素晴らしい。全て平らげ、水筒の水でトドメを刺すと、思わず溜息が漏れた。

「ふう……」

人心地ついて冷静さが戻ったグリユクが来た道を見ると、まだ志願者の到着は続いていた。みな人並みの体力はあるはずだが、空腹のままの二時間歩行では倒れる者もいただろう。そこでそれを放置するような無道な軍ではないはずだが（批判も多いが、彼らとて教

義の守護者たる騎士だ）、グリユクは少々、不安を感じた。感じたところで何か出来る訳ではないのだが。

「背囊を受け取って、中の食料で昼食を取ってくださいーい！ 空け方の分からない人は聞いてくださいねー」

缶詰も普及していないような地方、あるいは属領から来ている者もいるのだろう。定期的にそうしているのか、騎士の一人がそう呼び掛けていた。

それとは無関係に気づいたのだが、もう四日も同じ服を着て、汗もかいている。さすがに着替えたくてたまらない。

到着できた全員が食事を終わると、そんな希望を打ち砕いて班編成が始まった。二時間で結構な振るいが掛かったようで（並の体力があれば入れるという噂は疑わしくなってきた）、約二十人ごとに一班、併せて三十前後の班にしかならなかった。様子を伺うと、体力の平均が近くなるように集めているらしい。

一人一袋、配られた背囊はかなり重い。改めた限りは水筒の他、あと5食分の食料、吊り下げ型の懐中電灯、止血消毒などの簡易医療用品や薄手の毛布、ライター、飲料水調達用の濾過フィルター、多用途ナイフ、呼び笛などが入っていた。騎士ならまだしも、従士はこれを（実際の戦闘ではこれに銃や予備の弾丸が入り倍以上の重さになる）己の足で運ぶのだ。広大な戦線でこれを背負い、下手をすれば何百kmも戦場を移動するのだろう。ここで脱落しても再び食い詰めるだけなので、とにかく啓蒙者たちが魔女たちに戦を仕掛けないことを祈るしかないが。

そして、誰に合図するともなく行軍が始まった。分けられた従士志願者たちが騎士に付いて山道へ入り始め、山道を曲がって消えて行く。班に番号が振られているのかどうかは分からないが、グリ

ユクは先頭近い班に入れられた。空腹が満たされたとはいえ、疲労も癒えきつてはいないのだろう、後ろからは言葉はほとんどない。騎士たちも、何か符丁のようなものを交し合ってから各々の班を率いて無造作に足を運んでゆく。

グリユクも流れに応じて足を踏み出した。

2・選抜訓練開始（後書き）

ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。
二度とこんな見苦しい間違いはやらかしません……

3・襲来

私物にも支給品一式にも時計はなかったが、日が沈んでくればそれも容易に知れた。ここは東部なので、時差を考えれば西部の都市圏や更に西の王都は恐らくまだ明るい時刻だろう。

太陽は沈んだので、とつくに暗い。各々が指示通り、首から懐中電灯を下げていた。懐中電灯といっても、戦闘服などに吊り下げてスイッチなどの切り替えで信号などにも用いる様式で、平たい縦長の形状をしている。

最後の食事から既に五時間以上は経っているだろう。一時間ごとに小休止を繰り返しながら歩いて来たことを反芻していると、前方に灯火が見えてくる。それが何なのか判明するより前に、先頭の騎士たちが後ろ向きに歩きながら笛を鳴らして、号令する。

「それでは、この地点で簡易キャンプの設営に入ります。志願者の皆さんは我々の指示に従い、設営に取り掛かってくださいーい」

懐中電灯のカバーを持ち上げて前方を照らしている志願者をみて、グリユクも同様に前方を照らした。どうやら広い平地になっているようだ。昼に到着した場所より少々規模が大きい。後続の班も遠慮なく入ってくるので、立ち止ることなく先に従い、開けた場所を進んでゆく。やはり指示に従って班ごとに間隔をあけて待機していたが、グリユクは回りを照らすとテントや釜などがないことに気づいた。毛布を被って野宿をする覚悟を固めたところに、輸送車が5両到着し、そこかしこで安堵の声が上がった。本来なら物資を積載した輸送車（場合によっては馬車などだろうが）と共に行軍するのだろう。

予告なしに訪れた転調に戸惑いつつも、疲れ、あるいは飽きていた志願者たちは騎士たちの指示を受け、灯火やテント、釜の準備に

取り掛かっていった。

合わせて野戦服も支給され、こちらでも軽く歓声が上がった。恐らく新品などではないのだろうが、汗と垢に塗れた服を着替えられるだけでも福音というものだ。

設営が終わり、食事 昼のものと少し内容を変えただけだったが、慣れきるまでは疲労と空腹もあって今少し感動できるだろう、今後の予定についてレクチャーを受け、選抜の残り期間がさほど長くないこと（恐らく、背囊の食料が尽きるまでこのまま歩き続ける）が匂わされて、最後に当番制で睡眠を取ることなどが告げられると、班を三分割した編成を決めた。

くじ引きに敗れ、グリユクはあと二時間起きていなくてはならないこととなった。

「……………」

本来なら銃と兜、場所によっては胴鎧などを身につけて立つのだろうが、そういった役回りは随伴の騎士たちがやっているため、グリユクは野戦服に切り落とした太い枝を手斧で削って整えた短棍という、少々心もとない武装で騎士たちに習うように警備に当たっていた。

「（正確には警備の真似事だけだな…………）」

そういった事柄は正式に入団してから教えられることになるだろう。そもそも東部とはいえ、人に危害を加えられるほどの脅威的な妖獣などは先の大戦以来出現した記録に乏しく、例えば何かの偶然で現れても啓蒙者の戦力が直々に誅滅してしまう。元々が妖族たちによって領域の奥地から連れてこられるものが多いため、彼らが申し

込んできた（と、王国は主張している）休戦をこちらから破るような事態が来ない限りは死ぬ危険などは少ないだろう。音声放送などを聴く限り、最近議院は強行派が優勢らしいが……

「なあ、何か揺れね？」

唐突に話しかけてきたのは同じ班の、確か、サージャンという名前だった。中肉中背、黒髪黒目の軽い雰囲気の子だ。行軍中に他愛もないことを少々喋り合った程度の仲だが、嫌な相手ではなかった。

「揺れ……？」

「遠くでズーンズーンと響く感じなんだが……しないか？」

訊かれて、出来る限り耳を澄ます。さほど耳に自信がある訳ではない。

「……言われてみればそんな気もする」

告げてふとあたりを見まわすと、騎士たちが少々慌しく言葉を交し合っている。

何人かは騎士たちのテントの中の無線機に集まって、どこかと通話しているようだ。知る由もないが、出発地点のあの拠点だろうか。

「何か慌しいな。魔女どもが休戦協定でも破らかしたのかね」

「……………」

気の効いた返答もできずに黙っていると、騎士の一人が周囲の志願者に指示を出してキャンプ地の中央に集まるよう広め始めた。慌しくも何とか全員が集まったのか、騎士の中で最も階級の高そうな男が拡声器で告げた。

「候補生の皆さん、急ですがお聞きください、現在推定ですが、大型妖獣がこのキャンプ地の方角に進行中という情報を得ました！
繰り返します
」

王国よりはるか東の妖魔領域と呼ばれる、人類の住む生態系と異なる広大な異界的環境に生息する獣を妖獣と総称する。少々漠然とした分類であり、魚に似ていれば妖魚、鳥に似ていれば妖鳥と呼ばれる。ただ、いずれも大型のものは各種建築物に匹敵する巨体であり、兵器で以ってしても未だ対抗が難しい存在だった。過去の大戦で人類側を苦しめた大きな要因の一つでもあり、この場の従士志願者の群れでどうにか出来る相手では絶対でない。

常に何人かの騎士がやや離れて周辺を警戒しており、それで早期に発見されたのだろう。拡声器を通じた衝撃的な内容に、場が騒然とする。

「静かに！！ 仮にも王国地上騎士団への入団を志した諸君が、この程度で慌てて貰っては困る！ まさかここで我々だけで戦う訳はない！ 妖獣の相手は最寄の騎士団が急行します！ 諸君は我々と共に、一刻も早くこの場から離脱します。各員、背囊だけまとめて騎士の指示に従ってください！ 設備は一時放棄！ それでは、指示に従い離脱準備開始！！」

拡声器のスイッチを切ると、騎士は通信機のあるテントへ足早に歩いていった。

輸送車の一台が動き始め、放棄する積荷の代わりに体調を崩した者、怪我をした極少数の者などを優先して積み込み、発進して行く。不測の事態を想定して輸送車に積んでもあったのか、騎士の中には榴弾砲を組み立てて照準を確認している者もいる。

グリユクはサージャンたち他の班員と共にテントに戻り、背囊を

まとめると班を率いる騎士の指示に従った。

「最悪、覚悟しとくべきかもな……」

「食い詰めて歩かされて最後は化け物の餌か……」

微かに諦念の混じったその呟きに冗談のつもりで返すと、サージヤンが呻いた。

「さすがに洒落にならん」

体力の低いと判定されたものから優先して輸送車の後部に載せられてゆく。全部で三台、残り二台は騎士たちがこの場で持ち合わせていた数少ない武装のほぼ全てを載せて、妖獣に対して囷となるべく地響きのほうへ発進して行った。三台では、詰めに詰めても百人程度しか運べなかった。

「乗れない志願者の方は申し訳ありませんが、しばらく徒歩で逃げてください！ 安全地点で乗員を下ろしたら、すぐに回収に向かいます！」

サージヤンが恨めしげに鼻を鳴らす。

「だってよ。救援の手際次第じゃ見込みのあった奴から生贄になるらしい」

「……順番を逆にしたら尚更非道な話になるじゃないか」

「交代番で貧乏くじ、撤退で逆差別……そろそろ不幸の底も抜けて良さそうなもんだ」

グリユクと違って本音らしく、表情はかなり険しい。言いあいつつも、二人とも速度は緩めず足早に進んだ。当然ながら、歩くこと

になった志願者たちの列には日没前の雰囲気は全くない。何人が抜けた班と共に、腐葉土を蹴り、半ば走るような勢いの騎士たちに遅れまじと、不運な従士候補生たちはやや先ほどよりかなり近づいてきた地響きを背に、夜の山道を歩き続けた。

追い風が吹いており、それだけがわずかな慰めだった。

3・襲来（後書き）

ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。

4・目に見えぬ無音の気体は

後方で、爆音が響く。

恐らく先ほど二台の車輛で足止めに行った騎士たちが交戦に入っただろう。報道で聞いたことがある程度だが、妖獣の種類によっては携帯の榴弾砲ではまったく威力が足りないこともあるらしい。岩石射出架や火打石銃で立ち向かっていた中世から、人類の火力も格段に上がっているのだ。

直後にいくつか爆音や銃声、衝突音が響き、そして静寂が訪れた。

「……終わったのか？」

サージャンの言ったとおり、爆音や銃声はおろか、響いていた妖獣の足音までもが消えていた。

「案外弱い奴だったのかな」

安全が確認されるまではこのまま歩き続けることになるだろうが、一先ず状況打開を喜ぶような溜息がそこかしこから聞こえる。だが、それがすぐに動揺に代わる。

「……………っ！」

背中を押していた風が正反対に向きを変え、図らずも足が鈍った。埃が目に入り、反射的に顔を背ける。その時目に入ったものに違和感を覚えてグリユクが訝りながら胸の電灯のカバーを空けて後方を見やると、混乱が見えた。

「ぐが……………！？」

「うあ……あ……らあ……」

200mほど後方から、視界に入る限りの最後尾まで、選抜志願者たちがうめき声を上げながら倒れている。正確には、頭を押さえたり足元がふらつく程度で済んでいるものから後ろに行けば行くほど有様が重篤になり、泡を吹き出して痙攣している者、ここからは確認できないが、恐らく死んでいる者までいる。

「……！？」

「っ、何だ……何だあ……！？」

「走れ、ただし冷静に！」

騎士の一人が叫び、候補生たちが従う。

ただ、冷静にという訳には行かなかった。候補生たちが堰を切ったように走り出す。グリユクやサージャンだけでなく、無事な列全体が動揺していた。妖魔領域には物理法則に従わない”妖術”と呼ばれる力が存在し、妖獣の中にはそれを扱えるものもいるという。前方の生き残った候補生たちの列の反応は単にすぐ近くで出た犠牲に対する恐怖であり、妖術がどうこうと冷静に分析できた訳ではないだろうが。グリユクも、得体の知れない脅威を相手に歩く気にはなれず、走った。歩き通しのために足腰にだいぶガタが来ていたが、それでも恐怖には抗えない。

被害を免れた前方の騎士たちが事情を把握しようとして、走ってきた候補生の一人に問い質していたが、”妖獣のせいだと思う”以外の情報が分かる筈もなかった。

搬送や陽動で半減し、二十に満たない人数で恐慌に陥った多数の候補生たちを止められるはずもなく、山道を疾走する集団から身を護るように、騎士たちが道の脇に固まって警戒しながら進んでいるのが見えた。それにグリユクとサージャンが追いつくと、既に大半

は先へといつてしまっており、比較的冷静さを保っている少数の候補生たちが息切れしないようなペースで、銃を構えた騎士たちと合流しているのが見て取れた。

「騎士さんたち、俺らどうすりゃいいんすか！」

サージャンが抗議するように呼びかけると、副教練騎士長だという男が口を開いた。

「とりあえず地響きは今は収まっているようだから、妖獣の歩みは止まっている！ 私たちに従って慌てずに進んでくれ！ 我々もわからないんだ、後方の騎士が発光信号も寄越せない事態に遭遇したらしいということ以外は……」

「先に走ってつた他の連中に聞いたんでしょ！？ 後ろの方の連中が見えない何かでバタバタ死んだのを！」

サージャンが畳み掛けると、騎士たちに食って掛かる程度の平静は保てたらしい他の候補生たちもそれに習った。

「妖獣がどんな奴だか知りませんが、先に仕掛けた騎士を全滅させて、それで追い討ち掛けてきたってことなんでしょ！？」

「だから早く山を降りようとしている！ 救援は既に呼んだがこの短時間でこんな山奥までは来ない！ 先に行った連中のように闇雲に走って降りられるほど分かりやすいくりじゃないんだこのあたりは！」

互いに仕方ないのだが、両者共に殺気立ってきていた。もちろん歩みは止まっていけないのだが、選抜する騎士たちも選抜を受ける候補生たちも、辺境基地での従士選抜試験でこんな事態に陥るとは夢にも思っておらず、そしてどちらも迫りつつある危機に対して確実

な対策を持たない。騎士たちの武器は見る限り銃だけで、人間相手であればともかく質量の違いすぎるであろう（そして恐らく携帯型榴弾砲程度の戦力は返り討ちに出来る）妖獣相手に効果は期待すべきではないだろう。

恐らく騎士たちの言うとおりとにかく山を下りるしか手がないが、状況への耐性は候補生たちの方が低かった。彼らの方はやや実感が薄く、事態を明瞭に確認することを求めている。

グリユクは何も言わずに随行しながら状況を傍観していたが、その時変化があった。

「……また揺れた？」

誰ともなくつぶやく声。妖獣の 当然だが、この場に件のそれを直接見たものはいない 足音の地響きが再開され、それどころかこちらに接近してきているように感じられた。さすがに早足のまと言っわけにも行かず、全員が急いで走り出した。グリユクがつい後ろを振り返ると、その視線の先に、山道のカーブから小山のようなものが姿を現した。

いや、動いている。あれが妖獣だろう。やや遠いが、頭部の形状は角のない龍、目はよく分らない。胴体からは平原の獣のような強靱そうな四肢が下方に垂直に伸びて重量を支持しており、その体表全体で硬度を誇示する岩肌のような表皮 とうか、もはや装甲板、そう見えるものに覆われているようだった。推定するに、高さは10m近く。四足歩行でこれは驚異的といってよいだろう。見かけよりは素早く思える動きで、ドシドシと舗装も怪しい山道を踏みしめながらこちらに走ってくる。暗闇の山で彼らの懐中電灯の光を浴びて浮かび上がるその姿は 恐らく日中に遠くから見ればさほど恐ろしくはなかったのだろうが、正しく悪夢だった。

（右手だ！ 急だが斜面を駆け上げられ！！）

「……………!!」

突然、脳裏に明らかなの自分の意図していない言葉が浮かぶ。信じがたい事態にたじろぐが、それ以上に暗闇の山道を突進してくる圧倒的な質量に気おされ、グリュクは煙にでもするような気持ちで右手の森の暗がりへと走り出し、低木を掻き分けた10mほど先にあった急な斜面を駆け上がった。手や足腰の痛みも忘れ、両腕が塞がりカバーが下がったまままで前方を照らしてくれない懐中電灯の光を頼りに手探りで木の根や幹をさがして足をかけ、無我夢中でひたすらに登る。悲鳴やますます近づく地響きが耳を射抜くが、それでも足は止めなかった。

ふと気づけば、足元が水平になっている。とにかく斜面を登りきって、何やら獣道らしき所に出たらしい。我に返って背後を振り向くと、林冠が目に入った。山道から20mほどの高さか、先ほどグリュクがいたであろう地点を見遣ると、木々の枝葉の間の明滅で妖獣の動く影が窺えた。夜闇でよくは見えないが、懐中電灯の光のいくつかが、やや大きい光点となって周囲を照らしているのだ。動いているものは一つもない。妖獣が動きを止めて何をしているのが、湿った音で察せた。

「……………!!」

グリュクは足腰から力が消えるのを感じ、声にならない声を漏らすことしか出来ず、後ろに倒れこんだ。食料の入った缶や水筒が背囊の中から背を打ち、何とか我に返る。夜の木々の向こうでよく見えないのがまだしも救いと呼べるだろうか、惨事がすぐ傍で起きている。先ほど倒れた大勢の候補生たちも、同じ末路を辿ったのだろうか？ 林を隔てたすぐ向こうの出来事と、今の自分がそれを免れ生きていることとの落差が、強烈に胸を締め付けた。体を跳ね上げ、グリュクは喉の奥で膨れ上がった痛みを吐き出さざるを得なかった。

逃げ切った者がいるのかどうか分からないが、生きていれば逃げるにせよ戦うにせよ、何らかの形で抗うはずだ。この場で生きているのは彼と、妖獣だけということか。むせ返る鉄の臭いと酸の味が五感に焼きつき、尚も胃の中を吐き出し尽くしてから突っ伏した。安堵と失意に挟まれて、再び、自分の意図していない言葉が脳裏に浮かび上がって消えた。

（こちらだ、来たれ）

半ば自棄になって立ち上がると、懐中電灯のカバーを持ち上げ、細い獣道を歩き出す。斜面を駆け上がる時に捨てたのだろう、短棍は紛失していた。声の指し示す方向は、不思議と理解できている。ほどなく、木々の群れの中に違和感を見出し、近寄ってみると、グリュクの背丈よりもやや小さく、斜面を掘って屋根付き天窓のように形作られた人工物だった。簡素な板材と石材の組合せで、図面などを引いてあるようには見えないが、それでも細長い引き戸や紐で束ねた草本、そして供物らしきものを備えていた。王国でよく見られるような様式とは異なるが、祠なのだろう。

何故そうと分かるのか、それこそ理解しがたいことではあったが、ともあれ言葉の主はここにいるようだった。恐る恐る、扉を引く。砂埃に顔をしかめつつ力をこめると、扉が開いた。

4・目に見えぬ無音の気体は（後書き）

ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。

5・霊剣の求め

現れたのは、刃を下に、鎖によって岩盤から吊るされた一振りの剣だった。懐中電灯で照らすと、柄に幾つか意匠と思われる穴が開いており、それに鎖が通っている。古いものなのか、所々表面が腐蝕していた。

「……………！？」

三步ほど後ずさり、全体を照らし出す。無根拠極まることだが、脳裏に浮かぶ声の主がこの錆びかけた剣であることが、はつきりと分かった。

（意志の名の下に、吾が銘を示そう）

「……………！！？」

距離はそのまま、電灯のカバーを持ち上げ、鎖で吊られた剣を凝視する。

理由も分からないのは不本意だが、彼に語りかけているのはこの剣であるのは間違いない。伝承に聞く、意思ある剣というものだろうか。思索にかまわず、それは語りかけてきた。

（吾が銘、ミルフィストラッセ）

「……………」

剣が声も使わず語りかけてくるという極めて客観性に乏しい事態にただただ驚愕していると、剣は先を促してきた。

（？ 御辺の名を聞かせてくれ）

「あ、ああ。……グリユク……カダン」

随分と古風な二人称だ。思わず口に出して名乗ったが、剣はこちらの心境などは読み取れないのか　もしくは知りつつ無視しているか　、淡々と先を繋げた。

（よろしく、グリユク・カダン。早速だが、奴はアヴァリリウス。妖魔世界の奥地に生息する巨大恐蜴>きょうえきくだ）

「……！」

一瞬、思わず自失する。

剣は不気味にさえずるところか、彼らを襲った妖獣の名を特定してみせた。被りを振って、それに応じる。

「……名前はともかく、妖獣だなんてのは見れば分かるだろ。何で国境から離れたこんなところにいるんだ、そんなのが」

（恐らく、先の戦いで前線に連れてこられた個体が、何らかの事情でそのまま近辺で仮死状態となり、連れ帰られることなく今まで休眠していたのだろう。そして、御辺は与り知らぬであろうが、奴は動物の神経の働きを阻害する気体を分泌腺から放出する生態を持つ。御辺の国では神経ガスと呼ぶものだ。向こう側ならともかく、こちらの生態系でそんな代物に生身で対抗できる陸生動物は有り得ぬ）

神経ガスについては、魔女や妖魔を速やかに「倒し」、味方の安全を高める新兵器という売り文句で王国が盛んに広報を行っていることで良く知られていた。ただし、実態については機密が多く、どのようなものかを知る者は少ない。そんな兵器を身一つで生み出す怪物が実在するという言葉に、グリユクはただ戦慄した。

「……それが巡り巡ってサージャンたちを殺したってのか……！」

厳密に言えばサージャンはその死を確認した訳ではないが、とてもではないが確かめに行く自信はなかった。数日とはいえ行動を共にしていてそれなりに親しみも覚えていた者たちを襲った理不尽に呻く。神経をやられたのでは、今際の際に何も分からなかっただろう。アヴァリウスという妖獣にとつては、仮死から目覚めた空腹を満たすための当然の行動だったのだろうが、グリユクの胸中からはそのような取り澄ました視点は跡形もなく消えていた。悔恨と怒り、無力感が、己だけ生き残り、それに安堵してしまったという事実によって押し広げられてゆく。

（早速ではあるが、吾人の望みを聞き入れてはくれぬか？ その代わり、辺の望みを聞こう）
「……………」

沈黙を肯定ととつたか、剣は続けた。

（御辺には、吾人の主となるべき異能の才がある。吾人を帯びて、共に使命を果たしてもらいたい）

「……………使命？」

（いかにも。時を越え、心と心を繋ぎ、牙なき者の牙となる使命）

異能の才とやらには触れず、ただ単語を反芻しただけのグリユクに、剣は律儀に説明してきた。もっとも、その言葉は今一つ要領を得ないが。

（まあ、平たく言ってしまうえば人助けであるな）

「こつちが助けて欲しいくらいだよ……………」

（既に一度助けた。吾人の声は御辺のような者にしか届かぬゆえ、他の者たちは救えなかったが…………探せば御辺のほかにも生き延びた

者が居るかも知れぬ、まずはそれを救うのだ)

剣は滔々とそう告げた。

どう反応すべきか分からないでいると、もはや耳に慣れてしまいつつある地響きが再開された。何が終わったのかは嫌でも分かる。

「……まだあいつが下にいる。まさかお前が飛んでいってあいつを斬り殺してくれるって訳でもないだろう」

(そのようなことはできぬ。吾人は常に才ある剣士と共になれば、力を出すことが叶わぬ故)

「待ってればあいつがどこかへ行ってくれる保証もないから……」

剣に呼ばれ、死を免れ、こうして邂逅を果たしたこと。これが夢で無い保証など何一つ無かったが、グリユクは立ち上がり、剣に近寄って柄を握った。握る右掌に小さな痛みが走ったが、木の葉で切ったらしい。痛いといえば全身がそうだ。夢ではないという傍証くらいには数えてもいいかも知れなかった。

そのまま持ち上げて鎖をどうすべきかということに思い当たると、剣の周囲の大气が炙られたように揺らぎ、剣の表面の錆が、そして剣を岩盤にくくりつけていた鎖が塵となって音も無く落ちる。

グリユクは、刃を上には剣をかざし、半ば破れかぶれに呟いた。

「どうにかできるなら教えてもらおうか、ミルフィストラッセ」

ミルフィストラッセの説明によれば、魔女がその力を発揮するために、普通の人間 王国の定義するところの人類種 とどこが異なっているのかというと、それが「変換小体」と呼ばれる細胞小器官の有無なのだという。

全身の細胞に散在する変換小体が空間に存在している魔力の「線」に反応し、変換小体を内包する神経細胞によって増幅された魔力が可視領域にエネルギーを呼び出す。魔女たちはこれを魔法術と呼ぶそうだ。装甲艦であろうと爆沈し、超音速の飛翔炸裂弾さえも防ぐその威力を、グリユクも街頭における戦場からの映像放送で見たことがある。

そして剣によれば、魔女の血を引くグリユクにはそれを扱う資質があるらしい。成人するまで審問検査を免れたのは、王国の検査は血液検査で変換小体特有の蛋白質を試薬の反応の有無で検出する方式をとっており、何らかの原因で血中の変換小体が消失しているグリユクのサンプルは通過できたのだらうという。剣の発する声を聞くことができたのは、神経細胞の中で少数残存できていた小体が生用したためであり、本来は神経だけでなく、身体細胞のほぼ全てに変換小体が存在する。変換小体の活性を神経細胞以外でも維持することが出来れば、グリユクも魔女としての完全な能力を取り戻す。あくまで剣の言ではあるが、グリユクはそう理解した。

この場合、全身の変換小体を活性化する方法は分らないが、剣がその代わりを果たすことでグリユクは一応、22歳にして魔女として存在を始めるということになる。何の武器も持たないグリユクが、生きて確実にこの場を脱出するにはそれしかないだろう。

（此度は、御辺はただ握っておればよい。主に対して申し訳ない限りだが、指示と魔力は吾人が提供致す）
「わかった」

剣の周囲の空気が再び揺らぎ、グリユクの体にその芯から温まるような、力がみなぎる感覚が訪れた。心臓、指先、脳、顔面……体の全神経を魔力が駆け巡っているのだ。魔女も、このように力強い感覚を得て力を振るっているのだろうか。剣がぼんやりと光り、周囲を照らした。

（よし、まずは奴の居場所を特定する。御辺、五感を合わせて研ぎ澄ませ。酔うなよ）

剣が告げるなり、グリクが今までに体験したどの感覚とも違う、異様な光景が脳裏に飛来した。正確には光景だけではなく、よく分からぬ音や臭いまでが同時に感じられた。

新しい感覚に思わず狼狽し、今日一日だけで本当に生まれなおした気分を味わう。人が皆泣きながら生まれてくる理由があるのだとしたら、これがそうなのだろう。

「うああああああ……！」

（落ち着け主よ。御辺は今までに無い感覚の窓口を開かれて混乱しているに過ぎぬ。それは第六の感覚！ 魔力線に反応した魔女の神経が直接知覚している領域だ！）

「んなこと言われてもッ……！」

（奴は恐らく、久方ぶりの食事で満ち足りている。そのような心を探すのだ！ どんな生物であろうと、肉体を持つならば快・不快を感じる部分も共に持ち合わせている！）

「……………」

剣の示唆を受けて新たな感覚に徐々に慣れてくると、明暗に例えられそうな違いを感じ分けられるようになってきた。直感的には視界がばやけて明暗の差が大きく、彩りが極端になった印象だ。そしてその中に、柔らかく光る大きな場所を見出すことが出来た。純粋な快、不快を目で観るように感じ取れるということだろうか。目を開けてみると、目と耳で視界と音を同時に感じ取るように、視界に視覚とは異なる感覚が重なって感じられることも分かった。

「これが、魔女の感覚っていうものか……？」

（いかにも。ただし、万能などではない。離れば他の五感同様感じ取りにくくなり、然るべき方法で欺くことも出来る）
「わかった」

懐中電灯のカバーを下ろして足元だけを照らすようにしながら斜面を登りおえた地点まで来ると、改めて第六の感覚に身を浸した。
大きな快の感覚　妖獣アヴァリリウスは、斜面の淵から500mほど離れた森の中で休んでいる。元来夜行性なのだろうか、新しい感覚によって、四肢を曲げて瞼を閉ざしていても警戒を怠る様子は無いことが分かった。このまま斬り掛かったところで、普通剣一振りですぐにかなる相手ではないが

「これからどうする」

（仕留めるのみ）

「仕留めるって……奴の毒ガスはどうすればいいんだ」

（剣をかざせ）

「こつか？」

（そう、そしてクルクル回して突風を起こし、すいません冗談ですううううううう）

グリユクは無言で剣の腹を、すぐ近くにあった岩肌に向かって何度も叩きつけた。

「これからどうする」

（ま、まずは吾人が術を発し、ガスを分解する。その後、動きを封じて確実に殺す。具体的なタイミングはその都度指示する）

「よし……」

（……折れるかと思った……）

冷や汗をかく剣をかざし、グリユクは妖獣に向かって斜面を下り

始めた。

（それでは……参る！）

気合と共に剣が術を発するのが分かる。どのような原理でガスの分解などということをやったのけるのかは知らないが、グリユクはそのまま歩いて進んだ。残り300mほど、警戒を強めたのか、アヴァリリウスが首をもたげてこちらを凝視する。視野が重なる配置の両目で、まだ木々に隠れているはずのこちらを正確に見つめている。

（恐らく、音の他にも人間の目に見えぬ熱を感知しているのだ。今の吾人も人間の目に見えぬ光を放射して微量の残留ガスを分解しているが、奴が戦うと決めればこの比で無い量を分泌し始めるだろう。心せよ）

「ああ……」

残り200m。妖獣は既に立ち上がり、ガスで死なないこちらを警戒しているのか、ゆっくりと体全体をこちらに向けてきていた。斜面が終わり、グリユクも慎重に身構えながら歩いて行く。

アヴァリリウスが歩き出した。そのまま速度を速め、突進してくる。彼の心に深く爪あとを残した足音を響かせながら、比較的踏み固められているはずの山道に深々と足跡が残る。重量にして何百tか、その表皮の凹凸が体をかすめただけでも即死しかねない。

（そこまで！）

ミルフィストラッセの気迫と共に、妖獣の直下の大地が消失した。直径にして30m、深さもその程度はありそうな大崩落だ。ここに眼前の怪物を落とし、登れなくなった所を仕留めろということなの

だろう。だがタイミングが最悪だった。崩落の直前に妖獣は跳躍していた。非常に大きく、距離は30mといったところか。ちょうど穴を飛び越え、グリユクを踏み潰す計算だ。

「そッ……………!!」

一単語とて口に出せるはずもない刹那。

（なめるなッ！）

闘気と共に剣が更に術を発した。グリユクは思わず両手を突き出して防御するような動作をとっていたが、僅かならず時間が経過するのを感じて、戸惑いを覚えつつ姿勢を解こうとする。腕の動きが明らかに遅い。感覚だけは変わらず、アヴァリリウスまでもが空中に静止しているかのような状態でミミズの這うような速度でこちらへ漂ってくるのがわかった。彼の心を除く時間全体が強烈な遅延の中にあるようだ。

（神経の作用間隔を早めて擬似的に御辺に流れる時間を加速しているだけだ、今の内に討ち取れ！）

「（かわすんじゃないのかよ!?!）」

剣の急き立てるような指示にうるたえ胸中で（舌も体同様ろくに動かせなかった）口答えをしながらも、彼を妖獣に向かって構える。

（心を凝らせ、刃を念じるのだ。奴の皮を、肉を、骨を！ 眩く輝き、鋭く硬い金属が砕く様を!!）

主観では一分近い時間をかけての所作だった。グリユクは姿勢を下げつつ、ミルフィストラッセを頭上に向かって突き出し、アヴァ

リリウスの喉へ全力でと刃を付き立てた。

（心せよ、神経の加速を解く！！）

「うおおおおおおおおおおおあ！！！！」

切っ先へと気合を込め、意図せず咆哮する。

時間と感覚が唐突に一致を再開した。いや、全身が緊張した影響もあってやや効力が残っているか。体を屈めて前半身の直撃は逃れたが、このままではその後方に着地する後ろの半身に踏み潰される。グリユクは全力でミルフィストラッセを支えつつ、左へと転倒し、何とかそれ免れた。

大音響と共に巨体が頭から墜落し、喉から胸部を深々と切り裂かれた妖獣は赤い血液を大量に撒き散らしながら 滴るなどといった生易しい量ではない 転倒し、周囲を揺るがした。

剣が一際強く力を発する。妖獣の死体がすぐそこにあるので、ガスを分解するという光を強めたようだ。

グリユクは多少の擦り傷以外に特にそれらしい創傷もなく、血の臭いの立ちこめる崩落の淵でアヴァリリウスの最期を見ていた。体内には、まだいくらか原形を残した犠牲者たちがいるのだろ。そのような身の毛もよだつことを想像しつつ、斜面の上から魔女の感覚で感じ取った「満ち足りた心」の印象が、頭から離れなかった。確かに、妖獣は獣なりの幸福を感じていた。例えば一方的に奪われた命の数を勘定に入れても、一つの合計欄に差し引きされた結果が出てくるほど彼は単純ではなかった。

ただ、緊張も思弁も、続けるには限度がある。剣の囁きがそれを破った。

（主よ、血を落とした方が良い。土でも構わぬ）

「か、返り血か……うわ、ベトベト……」

全身を見回して、グリユクは呻いた。思った以上に血生臭い有様だ。先ほどもでさえ小さな創傷ならばそこかしこに出来ていたが、それどころではない。理由はあるとはいえ、一つの生命を殺したのだからと納得もしていたが

（急げ！ 魔女たちの間では知られているが、妖獣の血液は変換小体が多量に含まれていて、魔女が量を浴びると魔力線中毒を引き起こす可能性がある！ その量でも十分）

「中毒？ …… っていうのは…… 今の、このっ …… 頭痛、の……」

焦燥の滲む剣の言葉で思い出したかのように、体内から直接金槌で叩かれるような激痛が全身を駆け巡る。

グリユクが知り得ないことだが、原理としては皮膚に付着した血液中の変換小体が周囲の魔力線に感応することで、彼の神経細胞内の変換小体と共鳴に近い反応を起こし、神経を直接刺激している故の痛みだった。

「うあ、ああああああ ……」

（主、主よ！）

苦痛の余り、彼の意識はそこで途絶えた。

広がった血の海に倒れ伏し、剣がその手を離れ、小さな音を立てて同様に血溜りを撥ね散らす。

夜はまだ、明けていない。

5・霊剣の求め（後書き）

ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。

6・出発

粥の煮える匂いで目を覚ました。

土の上で終わっていた最後の記憶と体を包む温もりとが違うという違和感も手伝って、うろたえるように脳が覚醒する。頭だけを動かして周囲を確認すると、天井は暗いが、闇ではなかった。右手の扉の窓から光が漏れていて、広くは無いがそこに調度も整った室内であることが知れた。服もどうやら、野戦服ではない。血のおいなど微塵も感じられなかった。

近づいてくる足音と共に、扉が開く。

そして入ってきた姿にはどこかに見覚えがあったが、とりあえずは若い女だということしか分からなかった。年齢は恐らく同程度、背中の中ほどまで伸ばした黒髪をうなじで束ね、晒した額の下に銀縁の眼鏡。背こそ高めだが、街にいたなら目立たないタイプだ。両手に食事とランタンの載った盆を支えている。僅かに頭痛が残っていたが、グリユクは構わず上体を起こした。

僅かに空気を吸って、女が言葉を発する。

「お目覚めですか？」

「あ、ああ……………」

一先ずはそう答える。そう呻くことしか出来なかったとする方が正しいが。彼女は盆のランタンを持ち上げ天井から垂れ下がっていた吊具に掛けると、盆を差し出しながら名乗った。

「アニラ・リオーリと申します。こちら、どうぞ」

「あ、どうも……………」ありがとうございます。俺は……………」グリユク・カダ
ン」

グリユクは出された盆を受け取り、彼女、アニラに礼を言いつつ名乗り返した。盆の上には刻んだ野菜と炒り卵の混じった粥の皿と、香ばしさを漂わせる茶らしきカップ。

茶が彼の見慣れない緑の色をしていたが、グリユクにはそれよりも気になることがあった。

「あ、あの、俺の服とかは……」

「すみません、おおっぴらに出来ないので全部私が……」

彼が今ベッドの中で着ている服は、清潔にされた一般的な男物。得られた答えに、グリユクは感謝とともに少々の恥ずかしさを感じて僅かに彼女から顔を背けた。

慣れていることだったのか、そういうことに元から頓着しない性分であるだけか、アニラは特に気にした様子も無く、話を振ってくる。

「従士選抜に参加されていましたよね？ 私の顔は記憶に無いかも知れませんが」

「……あ!？」

思い出して思わず声を上げてしまう。列車から降りて駅を出た選抜志願者たちに移動するよう告げたのが、確かに彼女だった。

「思い出して頂けたみたいですね。普段はあの補給基地に勤務しております」

「ああ……てことは、ここは……俺を基地に運んでくれたってことですか？」

「いえ、ここは基地ではなくて、私の村で遠出の時や、狩りの時とかに使っている小屋です。あのあと休暇で村に帰っていたんですが、大きな地響きがあったので何人かで祠を確かめに行ったら……」

「祠……………」

食事に手をつけようとしていたグリユクの手が止まる。

「ええ」

彼女は、ベッドの下からミルフィストラッセを取り出して渡してきた。

「村の祠でこちらの霊剣さまをお祀りしておりました」

「すみませんでしたああッ」

「え、えーとですね……………」

要はこの剣は彼女の村の神格が何かだったということで、グリユクはそれを、状況打開への必要や剣本人の求めもあったとはいえず手に盗んだことになる。粥に額が付かんばかりの勢いで何度も頭を下げるグリユクに、アニラは困惑したようだがそれでも言葉を続けてくれた。

「祠を確かめに行ったら、妖獣と、その近くの血の海で倒れているあなたと霊剣さまを見つけてまして……………今は居りませんが、他の村の者と一緒にここまでお連れして、霊剣さまにはこちらで鞘を見繕ってつけてしまいました。ご勝手お許しください」

霊剣の収められた鞘をこちらに渡してくる彼女に、ただ困惑する。

「え、いや、勝手はむしろこっちで……………」

（主よ慌てるな）

受け取った剣は何事も無かったかのように語りかけてきた。状況

が飲み込めずに鞘に収まった剣を見ると、上等そうな剣帯まで付いている。暢気な剣にやや苛立つグリユクを見て、彼女はややおかしそくに語り始めた。

「大きな声では申せませんが、この王国東部は歴史的には魔女の勢力が強い地域であつて、過去の戦争で帰属が変わることが多かった経緯は、ご存知と思います」

「は……はい」

アニラが説明をしながらも身振りで食事を促したので、グリユクは匙を握って粥を啜った。

「私の村は、魔女の血を引く者こそいませんでしたが、古来からその強い影響下にあり……魔女を憎まない文化を今もひっそりと持ち続けているのです。この心を持つ剣、村では霊剣さまと呼んでいますが、大昔に偉大な魔女の一人が鍛え上げたといわれているもので……魔女を友と思いこそすれ魔女ではない我々としては、いつか相応しい魔女がこの土地に現れ、霊剣さまを……言い方は悪いですが引き取ってくださるのを待っていた訳です」

（病で力尽きた先代の主を匿い、世を去るまで世話をしてくれたのが彼女の村なのだ。ただし、辺境の村といえど審問の手が及ぶゆえ、かような山中に置かれていたという次第だな）

「ほうん……………」

話は聞きつつも勢い良く粥を啜っているのもともに反応できないグリユクに、ミルフイストラッセが補足を入れる。

「どうですか？ 霊剣さまは何か仰っておられます？ 私たちには分からないので……………」

「……霊剣さまねえ……………」

（それを御辺はぶつきらばうに剣、剣、剣と……この際宣言するが、吾人はただの剣ならぬゆえ、そのような呼び方は不本意極まる）

アニラの”霊剣さま”などという呼び方に胡散臭そうに匙を置くグリユクに、剣 否、霊剣 はそのように述べると、心なしの不機嫌になったような気配を見せた。

「えーと、お供え物ありがとうって言ってる」
「良かったー」

手元の霊剣が猛烈に抗議しているのが分かったが、グリユクは無視して茶を飲み干した。

心を持つ剣。真剣な状況でたちの悪い冗談を差し挟むのも、心あればこそということなのだろうか。

「ごちそうさまでした……おいしかったです」
「どういたしましたー」

グリユクは礼と共に盆をアニラに返し、

「ていうか……俺……どうすればいいんでしょう」
「え、どういふ……ご事情でしょうか？」

事情を知っている筈が無く、アニラは意外そうな表情でこちらを見ている。

「……話してませんでしたね」

グリユクは疲労が体の奥から引き返してくるのを覚えつつ、アニラにこれまでのことを平易に、少々曖昧に話した。申し訳なさを感じ

じつつも、出された食事を喉に掻き入れるのは止めなかった。

話し終えても、仔細を想像して彼の今の状況に共感しろというのが無理な話だろう、アニラは実感が沸かないという様子で軽く首を捻りながら反応してきた。

「大変だったんですね……今からでも基地に戻るべきかしら」

「ああ……人手が無いとあの事態の收拾は難しいだろうっていうか……曲がりなりにも魔女になった以上、俺は何としてもトンスラしなきゃいけない訳ですが」

「どうでしょうね……私の村にも審問官は来るので、部外者のグリユクさんがいたらすぐバレちゃうでしょうし……グリユクさんは何か目的とかが？」

「……………えーと」

就職予定先は大事件でそれどころではなく、またついでのアクショントによって就職に大幅不利な体質になってしまったといえる。何も言えずに固まっていると、アニラは少々大げさな身振りで、

「てことは、何も考えてないってことですか!？」

「いや、はい、そうなんですが……」

ふと、扉を叩く音が耳に入った。

「すみませーん! ガルリカ基地の者ですが、エチエ村の仕事小屋と聞いております、お時間頂けないでしょうかー!」

声の雰囲気から察するに、アニラとは無関係に、周辺の村での調査に訪れた軍人らしい。既に事件の調査が進んでいるのだろう。慌ててベッドを抜け、剣を帯びて開けた窓から身を乗り出すグリユクに、アニラが小声で呼びかける。

「ぐ、グリユクさん、荷物！ 洗った服とかも入ってます！」

「あ……どうもありがとうございます、こいつも礼を言ってます」

（まだ言っておらん！？）

「そんな……でもお氣をつけて！」

「はい、お達者で！」

（さらばだ！）

彼も余り大きな声は出せなかったが、精一杯感謝を述べた。やや名残惜しさはあったが、もはやスウィフトガルド王国には居られない。グリユクはアニラから荷物を受け取ると窓から飛び降り、大きな足音を立てないように注意しつつ小屋の裏道を走りだした。室内で時間が曖昧だったが、やや遅い朝といったところか。晩冬の冷え切った空気が首筋に沁みた。

数歩も歩かないうちに道を詳しく聞けずに出てきたことに気づき後悔したが、すぐに舗装された道に出ることが出来た。

路傍で背囊の中味を確認してみると、背囊自体も最低限の洗浄を済ませて乾かしてある他、食料や簡易医療キットにライター、ナイフといったほぼ全ての支給品が入っていた。懐中電灯も、配布時同様だ。一度血まみれにはなったが切れた電池を交換すれば動くだろう。アニラの非常に丁寧な仕事に感動を覚えてグリユクは胸中で呟いた。

「（こんなことにでもならなきゃ嫁に来て欲しかったかもなあ……）」

（情弱……吾が主の人生にそのような無難なプランは容認しがたいのだが！）

「実は考え筒抜けかよ、ふざけんな！！」

もはや難癖の次元に差し掛かった霊剣の陳情に嚴重な抗議を突き返し、山道を歩き続ける。とはいえ、詳細こそ聞いてはいないが、陸上騎士団の従士選抜の志願者が国内に入り込んだ妖獣に大量に殺害されるという前代未聞の事件の現場の、さほど離れていないところで騎士団支給の背嚢を背負っているのは不自然かも知れない。

（主よ、これからどうするのだ）

「……お前の希望とか、ないのか？　一応命の恩人だし、無理なことでなければ聞くよ」

グリユクは答えた。念じても通じるようだが、口が動かさないとこちらの調子が合わないらしい。

霊剣は相変わらず、彼の精神に直接語りかけてくる。術が使えるなら音声を発振しても良さそうにも思えるが、剣にしてみれば声を誰かに聞かれてはまずいのだろう。

（主の記憶は我が記憶、なれば御辺の幸福こそが我が幸福よ。しかし、もはや魔女は徹底して排斥されるのがこの地の概ねの有様である。血を引く、素養があるというだけでな。執拗な検査は既に終わっているが、何をきっかけに発覚するか分からぬ。不本意ながら、吾らが日々を送るには出国しかあるまい）

「出国って……公式にいける国はどこも啓発教義の国だろ。ベルゲに行けっというのか」

（いかにも。吾人は昔魔女の手によって生み出されたという次第もある）

「そういえばそんなこと言ってたな」

ベルゲ連邦は、啓発教義を奉じる王国とその影響下の国々に敵対し、啓蒙者たちに汚染人種として絶滅目標として指定を受けている

国（正式には、啓発教義連合も啓蒙者たちも国家と認めていない「東部叛乱勢力地域」）である。ミルフィストラッセの記憶に拠れば、教会資本による主要メディアで主張されるような不合理と呪術の支配する未開の地域でもないらしい。確かに、それが事実であれば衆生の囁く通り、真理と栄光のスウィフトガルド王国は屎尿の魔力や砕いた黒焼きを混ぜ込んだ軟膏といったもので戦艦を落とそうとするような呪術主義者たちを相手に苦戦しているということになる。

しばらく道の両側を木々が遮っていたが、不意に右手の森が開いた。山の空気に、雲間から差し込む陽光が清々しかった。見下ろせばやや狭い盆地が広がっており、遠くには自動車向けの幹線道路や西部に向かって伸びてゆく高圧鉄塔の列、遠くに見える鉄道の他はただ林や耕地が広がっている。

北に少し離れて窺える流れは、ベルゲ連邦から流れているカフ川だ。顎に触れると、むさ苦しく伸びてきた髭が嫌でも分かってしまった。深く息を吸い込み、霊剣に問う。

「そういうことなら、当面は緩衝諸国を抜けてベルゲを目指そうと思うんだが、それでいいか？」

（出国幫助者のコミュニティで情報を集めるべきか。吾人も密出入国に関しては多少の記憶があるが、現代でも通用するのかどうかは分からぬ）

「金とか要るのかな」

（そつえば御辺、すつからかんであるな）

「食い詰めてたんだから当たり前だろ……」

毒づく。鞘のままの饒舌な剣で脇に突き出ていた三角点を軽く叩いて制裁を加えると、グリユクは再び歩き出した。

6・出発（後書き）

終了です。

ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160y/>

霊剣、誘う

2011年10月29日14時23分発行